

「腫瘍マーカー—生化学的・免疫学的研究と臨床応用」

札幌医科大学教授・第4内科 漆 崎 一 朗 編集
金沢大学教授・第1内科 服 部 信

愛知県がんセンター病院副院長

太 田 和 雄

癌治療進歩のためには、早期診断の精度をいかに高めるかということ、癌化学療法をいかに進歩させるかということが重要である。癌の手術療法、放射線療法は今日、技術的にはほぼ限界に達していると言えよう。したがって、従来の癌の診断法に勝る鋭敏な診断法によって、治療手術・放射線療法が可能な癌が早期発見されるようになると、癌の治療率は一層向上するはずである。それが、癌に対する定期検診に応用する有用な血液生化学的検査法、すなわち腫瘍マーカーに寄せる大きな期待である。このような背景のもとに、近年、癌の臨床において腫瘍マーカーの研究はますます盛んになってきた。あたかも各種の抗癌剤の開発に世界中が必死になっているように、新しい有用な腫瘍マーカーの開発は、これが癌の診断に広く採用されるようになり、癌の生物学的研究としてのみならず、実際の臨床に役立つことが次第に明らかとなるにつ

れて、その研究開発の状況は目を見はるばかりの競争の烈しさと、数多くの新しい優れた腫瘍マーカーが次々と登場してきた。そして腫瘍マーカーの成績はもはや必須不可欠の検査となってきた。

ここにおいて漆崎一郎、服部信両氏の編集になる「腫瘍マーカー—生化学的・免疫学的研究と臨床応用」なる書が上梓されたことは誠に時宜にかなったものと言えよう。本書は編者らの述べているごとく、一面からみれば臨床家のための書であるが、他面では悪性腫瘍の生化学・免疫学的研究を志す者のための解説書とも言える。“腫瘍マーカーを理解するうえで、本書が臨床家ばかりでなく、広く医学、薬学、生物学の分野の研究者にとっても役立てば幸いである”とあるが、まさにそのとおりで、本邦でも外国に負けず、新しい腫瘍マーカー開発に取り組んでいる学者は多い。本書に盛られた長年蓄積されてきた腫瘍マーカー研究を

糧として、世界的に通用する優れた腫瘍マーカーが本邦から開発されることを願うものである。

第2章の“各種腫瘍マーカーの性状検出法と臨床的意義”では、その専門家によって要領よく解説されている点は、そのデータを読むうえに大いに参考になろう。第3章の“腫瘍別にみたマーカーの評価”は、各種腫瘍の診断における腫瘍マーカーの値の読み方について、まさに実地臨床家の良き手引きとなろう。第4章の“腫瘍マーカーによる癌の治療効果判定”では、治療効果のモニターとしての腫瘍マーカーの利用が、患者の長期の follow-up にとって今後ますます重要な検査となることを物語っている。そして第5章の“腫瘍マーカーによる癌のスクリーニング”は癌の臨床にとって夢であり、最も期待しているところである。

腫瘍マーカーは、抗癌剤と共に今日最も熱い目で期待されている。本書は腫瘍マーカーの研究の解説として優れた手引き書である。今日、新しいモノクローナル抗体による腫瘍マーカーが次々と出現しつつあるとき、その著しい発展を遅れることなく紹介出来るよう、いつの日か改訂されることが望まれる。

B5判 302頁 図148 写真24 1985

¥9,200 送料300円

医学書院 刊